

奈良 峰子（なら・みねこ）

1、プロフィール

歌人。昭和 13 年「芸林」創刊に参加し、尾山篤二郎に師事する。17 年間在籍のち「花実」同人。41 年「コスモス」に入会し、有力な同人として活躍した。

<生没>

1907(明治 40)年1月 15 日～1999(平成 11)年 11 月 16 日

<代表作>

『一つ湖』

<青森との関わり>

北海道生まれ。昭和 17 年八戸市に移住。35 年夫兵亮と地方歌誌「氷炎」を発行。41 年コスモス八戸勉強会を作る。

2、作家解説

本名はとみゑ。幼少の頃に、父が冬山で遭難死したことが峰子の性格形成に大きく影響し、作歌の動機もこの父の死に因って、昭和 11 年より作歌をはじめ。13 年『新万葉集』に5首登載され、同年「芸林」が創刊され同時に入会し、尾山篤二郎に師事された。

17 年に八戸市に移住する。30 年に 17 年間在籍した「芸林」を退会し、「花実」同人となる。35 年に夫兵亮と共に地方歌誌「氷炎」を発行し、地域の短歌の普及と後進の育成につとめる。

41 年に「コスモス」に入会し、コスモス八戸勉強会を作る。30 年より県短歌大会、北奥羽大会等の選者を担当し、青森県、八戸市の短歌の発展に尽力し、青森県歌人賞、八戸文化賞を受賞した。

旧い家の崩壊、没落の過程をつぶさに見て育った峰子にとって、家と家族、家族を貫く血の流れは宿命であった。そのためか歌は定型を尊重し平明でありな

がら、少しの破綻もないが、どことなく暗い影に満ちている。それがまた峰子の歌の持ち味でもある。

峰子の歌は早くから注目されていて、「芸林」の時期の昭和 25 年に宮柗二から「批評のこまかい点につきましては只今省略しますが、非常に澄んで細い、しかも内容が外にちらず内に向かうという展に注目し……」と批評されている。

3、資料紹介

○『一つ湖』

図書

1981(昭和 56)年 1 月 25 日

195mm × 135mm

昭和 41 年から 55 年までの 14 年間の作品から 460 種を厳選し、配列はほぼ年代順に編集された第 1 歌集。紋章、北の河、冬終らずの 3 章に分けて、宮柗二の題簽、著者の略歴、あとがきを掲載している。